聴覚障害者及び視覚障害者のための大学

筑波技術大学ニュース

第 10 号　発行日：2008年12月　www.tsukuba-tech.ac.jp

国立大学法人
筑波技術大学

中国中州大学との大学間協定締結

●はじめに

平成 20 年度本学の国際交流活動の一環として、大沼学長、竹田理事が中州大学を訪れ、中州大学との大学間協定を締結しました（写真 1）。本学はこれまで中国の 3 大学（天津理工大学、北京連合大学、長春大学）と交流協定を結び、障害者高等教育の発展に尽くしてきましたが、中州大学は中国における 4 番目の姉妹大学となりました。

写真 1 ：筑波技術大学と中州大学の大学間協定書調印式

●交流活動の概要

中州大学との交流活動が 2006 年の筆者と産業技術学部荒木教授の中州大学訪問から始まりました。2007 年 9 月、本学大沼学長が中州大学を訪問し、林学長と会談を行い、交流を深めました。2007 年 11 月に本学で行われる「アジアにおける視覚・聴覚障害者の高等教育と就労」に関する国際シンポジウムに中州大学蘇副学長が出席し、講演を行いました。これらの交流活動を通じて両大学の相互理解・相互信頼関係ができ、大学間協定の締結に至りました。

●中州大学の概況

中州大学は 1980 年に創立された公立大学です（写真 2）。工程技術学院、情報工程学院、芸術学院、聾芸術設計学院などの 13 の学院を有しており、400 名余りの教育スタッフと一万名余りの学生が在籍しています。

聾芸術設計学院は中国の中西部における唯一の聴覚障害者を対象とする高等教育機関であり、2001 年に設立されています。聾芸術設計学院では全国の聴覚障害者を対象に単独試験によって入学者選抜を行っています。同学院では手話通訳専攻、古建築絵画専攻、写真技術専攻、装飾芸術設計専攻、コンピュータマルチメディア専攻が設置されており、378 人の聴覚障害学生が学んでいます。

写真 2 ：中州大学と筑波技術大学の大学間協定締結を祝う幕を掲げる校門

写真 3 ：学生作品例

手話通訳専攻では健聴者の学生を受け入れています。聾芸術設計学院は同大学芸術学院と教育スタッフを共有しており、30 数名の教員・技術職員が聴覚障害者を対象とする聾芸術設計学院と健聴者を対象とする芸術学院の教育を担当しています。両学院で共通した授業科目において聴覚障害者が健聴者と一緒に授業を受け、情報補償の手段として手話通訳者が通訳を行います。基礎科目、専門基礎科目と専門科目はすべて必修科目とされています。写真 3 は学生作品例です。

手話通訳専攻は手話通訳者の育成を目標としており、芸術設計系の聴覚障害をもつ学生とセットで職に就くことも考えられるそうです。中州大学の手話通訳専攻は中国で唯一の手話通訳関係専攻であるため、試行錯誤が繰り返されているように思われます。

●まとめ

中州大学との大学間協定締結を契機に、両大学間の学術交流、教職員の交流および学生の交流が一層盛んになるものと思われます。今年 11 月 13 日～ 14 日に本学で開かれた「アジアにおける障害者のための高等教育機関への入学状況と取り組み」に関する国際シンポジウムに中州大学聾芸術設計学院の孟繁玲副院長が出席されました。内容については別に譲りますが、締結後直ぐに、ここ日本において貴重な情報交換の場を設けることが出来ました。

産業技術学部　産業情報学科　教授　張 晴原

第４回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムを開催

●第 4 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

去る 10 月 26 日（日）、本学が中心となって運営している日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）と本学の共催で「第 4 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」を開催しました。今年で 4 回目となる本シンポジウムは、これまでで最高の 258 名という参加を得て、大変盛大な会となりました。

1 日に渡って行われたプログラムのうち、午前の分科会では、教員を対象とした「学内支援体制の充実と教員の行動原理」、開催地である京都の取り組み事例を中心とした「聴覚障害学生支援における大学等連携の展望～関西地区の取り組みから～」、聴覚障害学生向けの「卒業後を見据えた聴覚障害学生のエンパワメント」の 3 つのテーマに分かれ、ディスカッションを行いました。いずれの会場とも定員を超える参加者で溢れ、熱気一杯の議論をすることができました。

また午後の全体会では、各分科会報告の後に「情報保障支援の新たな可能性を探る～医学・薬学・理工学系での取り組みから～」というテーマで医療系大学における支援事例をもとにパネルディスカッションを行いました。各パネリストからは、これまでほとんど支援事例が積み重ねられてこなかった専門分野での取り組みについてご紹介いただき、情報保障の質を高める工夫や教育的視点に立った支援体制構築の必要性について新たな展望を示すことができました。

全体会の様子

●聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2008

今回のシンポジウムでは、今までにはなかった 2 つの企画を同時開催しました。その 1 つが「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2008」です。

これは、全国の大学・機関で日頃実践されている支援の取り組みを報告いただき、関係者の創意工夫やアイディアの斬新さを表彰する企画です。シンポジウムの午前と午後の合間のランチセッション企画として実施され、約 20 大学・機関から参加の応募がなされました。工夫を凝らしたポスターが並ぶ会場では、参加者同士が思う存分情報交換をすることができ、発表者にとっても大きな励みとなる企画であったと思われます。

○ PEPNet-Japan 賞
　同志社大学障がい学生支援室
○ 準 PEPNet-Japan 賞
　日本社会事業大学障がい学生支援組織 CSSO
○ 審査員特別賞
　関西学院大学キャンパス自立支援課
○ アイディア賞
　関東聴覚障害学生サポートセンター
○ Good プレゼンテーション賞
　宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター

受賞組織は参加者からの投票によって決定され、得票の多かった以下の５組織に対して大沼直紀学長より賞状と記念品が授与されました。表彰は全体会の場で行われましたが、受賞した組織はいずれも聴覚障害学生支援に関して長い歴史と伝統のある大学・機関で、表彰状を手に思わず感激の涙をこぼす場面も見られました。

●バスで行く京都四大学障害学生支援室めぐり

もうひとつ、シンポジウム前日に特別企画として実施したのが「バスで行く京都四大学障害学生支援室めぐり」です。これは、京都市内で聴覚障害学生支援の先端的な取り組みを行っている大学を訪ね、支援室の活動について見学させていただくツアーで、全国から応募のあった大学教職員、支援学生など25名が参加しました。

大学が多く、障害学生支援についても日頃から熱心な取り組みを行っている京都地区だから実現した企画で、ツアーには以下の四大学にご協力をいただきました。

○ 京都精華大学障がい学生支援室
○ 京都産業大学ボランティア活動室
○ 京都大学身体障害学生相談室
○ 同志社大学学生支援センター

障害学生支援室めぐりにて

いずれの大学でも支援室の方々には非常に丁寧な説明をいただき、資料だけでは解らない活動の状況や各大学の個性に触れることができました。また、参加者の中には今年大学に入学を予定されている高校生も含まれていて、参加者同士の交流の場としても非常によい機会となったのではないかと思います。

障害者高等教育研究支援センター　准教授　白澤 麻弓

● 卒業生向け出張スキルアップ講座の実施

講座全体の様子

平成20年1月24日から3月26日までの日程で、基本情報技術者の資格取得を目的とした卒業生向けの出張スキルアップ講座を秋葉原UDXと東京丸ビルで合計13回実施しました。各回の講座には19時から21時までの2時間、仕事帰りの卒業生数名が業務で忙しい中を熱心に参加してくれました。この講座は平成18年度に引き続き2年目の企画で、本学の短期大学部聴覚障害関係学科卒業生から寄せられる要望に応える形で始まったものです。講師は本学産業技術学部の教員7名が交代で担当し、基本情報技術者試験の基本（午前問題中心）と応用（午後問題中心）の2クラスを開講する形で、幅広い出題範囲をカバーできるようにしました。講座と本人の努力が実を結び、この4月の基本情報技術者試験で本講座の受講生の中から合格者が出ました。卒業生をはじめとする聴覚に障害のある社会人にとって、就業時間後の自己研修講座の受講は手話通訳などの情報保障の問題があって難しい状況があります。このような講座は彼らの学習機会を確保し更なるスキルアップに繋がるものと期待しており、本学に課せられた社会貢献の役割

午前問題クラスの様子

の一つと考えています。

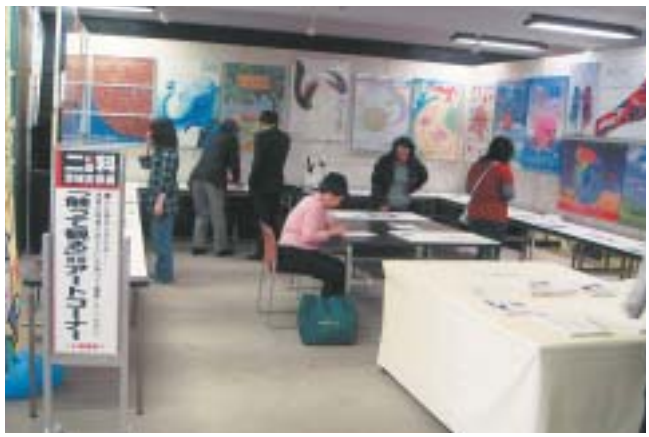
本講座は文部科学省からの「再チャレンジ支援経費」プロジェクトの予算で実施したもので、この経費では他にも卒業生を対象とした「障害者年金の基礎」「就労環境下でのストレスとその対応」の講演会を手話通訳・文字通訳の情報保障をつけた形で実施しました。また、eラーニングシステムの整備も並行して進めており、これらの講演会の講演部分を字幕付きのコンテンツにすることも検討しています。このようにIT技術を活用しての学習機会の増加にも取り組んでおり、本学とスキルアップ講座の会場をインターネットのテレビ会議で接続しての講座の実施なども試験的に実施しました。会場へのアクセスを不要とする、本学から発信する新しい形のスキルアップ講座や、それらのeラーニングシステムを活用した形での学習環境の整備も進めており、更なる学習環境の充実を進めていく予定です。本年度も、昨年度と同じく資格取得を目的としたスキルアップ講座や、卒業生が希望するテーマの講演会、卒業生同士の就労状況に関する情報交換会、などの企画を計画・実施いたします。本学のホームページや同窓会を通して案内をいたしますので、興味・関心がある方は是非積極的に参加してほしいと考えています。

産業技術学部　産業情報学科　准教授　河野 純大

● 二科展「触って観る」アート展示等に本学「触って観る」アートプロジェクトが協力

昨年度、第92回二科展（東京六本木・国立新美術館）で、二科会と本学「触って観る」アートプロジェクトの連携により実現した「二科展『触って観る』ポスター・アートコーナー」には、視覚に障害のある方々、ボランティアの方々をはじめとして、一般の方々まで実に多くの鑑賞者が訪れました。このユニークな取り組みに、テレビ、新聞、視覚障害関係機関誌などから多くの取材が入り、マスコミにより全国にも紹介され、予想を遙かに上回る大きな反響がありました。

こうした反響を踏まえて、「触って観る」アートプロジェクトは、積極的に活動を継続しています。



二科茨城支部展での「触って観る」特別アートコーナー

●筑波技術大学　二科展デザイン部　受賞作品特別展

2008年1月25日から28日まで、つくば西武ホールにて「筑波技術大学　総合デザイン学科　二科展デザイン部　受賞作品特別展」が開催され、展示会場の中央に、「触って観る」ポスターコーナーが特設され、立体ポスター8点が展示されました。

当コーナーに展示された立体ポスターは、前述の六本木の国立新美術館で開催した時のアドバイス等を受けて新たに作成したものです。当コーナーへは本学の視覚に障害のある学生、つくば地区の高校に通う視覚に障害のある学生の関係者も来場しました。また、「触れる天体写真展」を企画した常磐大学の先生も来場し、「触って観る」ポスターコーナーに関しての意見交換も行いました。本特別展も、新聞、情報誌等で取り上げられ、「触って観る」アートの理解、PRのよい機会となりました。

●二科茨城支部展（茨城県水戸市県民文化センター）

本特設コーナーでは、デザイン作品（22点）のみならず、洋画（6点）、写真（5点）の作品も立体化され、触る彫刻作品も展示されました。洋画・彫刻・写真・デザインの、二科4部門全作品を「触って観る」ことができるコーナーです。

また、以前から要望のあった、音声による画像情報支援システムも展示し、「第23回国民文化祭・いばらき2008ポスター」については色彩の情報提供も試みました。（音声情報システム協力：東京カートグラフィック株式会社）

本学教員で視覚に障害のある長岡教授撮影の「犬がドアを開ける瞬間」の写真も展示され注目されました。

アンケートにも積極的な参加が見られ、「触って観る」特別アートコーナーへの関心の高さ、また音声情報に対する期待など、貴重なアドバイスが得られました。

本特別コーナーに関しても、新聞等で詳細に報道され、その記事を読んだ読者が、本特設コーナーを目当てに来場するなど、「触って観る」特別アートコーナーへの関心醸成にとって良い機会となりました。

尚、「触って観る」特別アートコーナーへの本学研究プロジェクトチームの支援に対して、二科茨城支部展デザインの部から「特別賞」が授与されました。

●二科展（東京六本木・国立新美術館）

これまでにいただいたアドバイスを受けて、デザイン部門入選作品のうち 23 点を立体化して展示しました。そのうちの 1 点には音声解説も付加しました。「昨年より一層、鑑賞しやすくなった」、「音声情報も必要だ」等の反響があり、「触って観る」アートコーナーには前年同様、高い関心が寄せられました。

賑わう二科展での「触って観る」アートコーナー
写真中央はベトナム大使ご夫妻、
その左は今村二科デザイン部代表

●音声による解説について

ポスターに記載された文字情報を正確に伝達するために、音声情報を付加することを試みました。立体コピーの裏側に IC タグを埋め込み、手指につけた装置を用いてタグに書き込まれた情報を読み取り、音声情報をよびだす仕組みです。手指につけた読み取り装置の特徴は「指の腹」がフリーであり触鑑賞を妨げないことです。

画像情報の音声化については、日常的に点字情報を利用している視覚障害者の意見を参考にして、全体説明と部分説明を分離しました。このことによって、全体説明を受けてから観賞したい人、反対に鑑賞してから全体説明を受けたい人の両方に対応できるようになりました。

触鑑賞は手指を動かしながら鑑賞するため、鑑賞部分は常に移動・変化することになります。触覚情報と音声情報のタイムラグを軽減するために、1) 音声情報の読み上げまでの時間を短くする、2) 読み上げる内容は単語レベルにするなどの工夫をしました。また、「視力があった時の色の記憶を失いたくない」という要望に応えるため、3) 色の情報を言葉で加えました（例：青い空・緑の大地・白い鳥等）。今後は「鑑賞を楽しむ」ためにはどのような音声情報が必要なのかについて検討を行う予定です。

今年度は、彫刻部の会員の先生からも「触って」鑑賞する彫刻作品が提供されました。「触って」鑑賞できる彫刻にも注目され、皆さん楽しんで「触って」鑑賞されていました。

本プロジェクトは、ロシア ノボシビルスク州立点字図書館の方々と交流をはかったり、つくば美術館、茨城県立図書館、茨城県庁 2 階フロア、つくば市民ギャラリー、水戸医療センター等で作品展示を行うなど、多方面で積極的に活動しています。

●ロシア ノボシビリスク州立点字図書館と交流

2008 年 9 月 4 日、ロシア語が堪能な宮川正弘本学名誉教授（写真右から二人目）の案内で、ロシア ノボシビルスク州立点字図書館長 Yuriy Lesenevskiy 氏（写真右）とロシア正教司祭 Andrey Fedorov 氏（写真左）が、本学総合デザイン学科を訪問し、「触って観る」ポスターを鑑賞されました。

ロシア ノボシビルスクの点字図書館でも同様の「触って観る」立体アートを制作しているとのことで、将来、両国の「触って観る」アートを交流して、展示会を相互に開きたいとの話も出ました。お二方とも、とても熱心に興味深く、本学の「触って観る」ポスターを鑑賞されました。

本学の「触って観る」ポスターを 1 点、ロシアへ寄贈。ロシアからも立体アートが本学へ贈られました。

二科本展で音声説明を聴く来場者

日露の交流（筑波技術大学総合デザイン学科教室にて）

●「触って観る」アートプロジェクトの活動・作品に関する受賞

☆二科茨城支部展

「特別賞」(「触って観る」特設アートコーナーに対して)

☆いばらきデザインセレクション 2008

「知事選定」(「触って観るポスター・アートの展示・啓蒙活動及び作品」)

☆第 23 回　国民文化祭・いばらき 2008 美術展デザインの部

「つくば市議会議長賞」(「触って観るポスター掲示板」)

「入選」(「眼で観るポスター掲示板」)

尚、当プロジェクトの研究及び活動は、科学研究費補助金萌芽研究「視覚に障害のある人が絵画等の画像情報を取得し鑑賞する為の研究」の一環です。

「触って観る」アートプロジェクトメンバー

安田 輝男[*1]　生田目 美紀[*1]　井上 征矢[*1]　岡本 明[*2]　長岡 英司[*2] ([*1] 筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科／[*2] 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター)

「触って観る」アートプロジェクトの目的

①本学の聴覚に障害のある学生の作品を、本学の視覚に障害のある学生が鑑賞できるようにすることにより、両障害系の学生及び教員の交流を図る。

②視覚に障害のある人にも美術館・美術展等へ足を運んでもらえるよう、広く啓蒙普及活動を行う。

③誰にでも安価に簡単に立体アートが作成できるような研究開発を行う。

産業技術学部　総合デザイン学科　教授　安田 輝男

● スタッフ・デベロップメント（SD）研修を実施しました

第 1 回 SD 研修の様子

筑波技術大学には、270 名の聴覚障害・視覚障害学生が学んでいます。この数は、我が国の大学・短大・高専 1,230 校に学ぶ 5,404 名の障害学生（平成 19 年度日本学生支援機構調査）の、実に 5 %に上ります。その多さと、全ての学生が障害者であるという“特別性”が、本学教職員の教育及び学生生活における学生対応を規定しています。健常学生と同様の教授法では十分な教育はできません。健常学生が受けるサービスでは、学生生活を謳歌できません。ここに本学特有の FD ・ SD 研修の意義があります。

平成 20 年 4 月 1 日より、大学設置基準が改正・施行され、「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するもの（第二十五条の三、教育内容等の改善のための組織的な研修等）」とされ、いわゆる、FD（Faculty Development：教員の教育能力開発）研修の義務化となりました。

本学では『FD ・ SD 企画室』を設置し、これに対応していますが、更に、逸早く SD 研修も系統的に行なうことしたその意図は、事務組織も本学の掛け替えのない力であり、同時に、他大学とは異なる学生対応－学生の受容とアドバイス、企画、小さな工夫等－能力が必要不可欠であるとの認識からです。以下に、本年度 SD 研修の取組みと、今後の向うべき方向性について述べさせていただきます。

●３大学から学んだこと

本年度、『学生生活及び生活自立のアドバイザーとしての職員』を年度テーマとして、3 回の SD（Stuff Development：職員の能力開発）研修講演会を開催しました。3 大学の障害学生支援担当者に各大学の支援内容を解説いただきましたが、その特徴は次のようにまとめることができます。

○日本福祉大学：障害学生自身によるコーディネート。学生自らが支援ボランティアを募集し、支援室はそれをサポート。

○東京学芸大学：一人の障害学生に一つの小委員会を設置。学外実習にも補助者を配置など、きめ細かく対応。

○大阪大学：大学の責任としての障害学生支援。障害学生を含む多様な学生が、大学の可能性を増加させる。障害者の視点からの学内点検（アドバイザリーボード）。障害学生からの学び。

3 大学はそれぞれに支援のスタイルが異なり、画一的な方法で取り組むことの無意味さを示しています（対応の個別性）が、同時に、障害学生を単にサービスや支援の提供対象者とだけ見るのではなく、「障害学生の自立のサポート（日福大）」、「障害学生と共に考える（阪大）」という視点の重要さを改めて突きつけられた思いです。

ともすれば、“してあげる”という気持ちの中で障害学

生に対応しがちですが、まず大学として、どのように障害学生と向き合うのかを考え、学生と教職員が自らを、そして共に大学を、変革する力となるような、その可能性を見出そうとする姿勢をこそ３回の研修から学ぶべきです。

●自立支援の中で

大学における障害学生への支援は、自立支援という大枠の中で考えると理解しやすくなります（下表）。

自立支援	・自身のコーディネートの支援 障害を知る、できないことを知る、必要な支援を知る、自身で探す ・修学支援 専門的知識の提供という大学固有の役割を、情報保障を中心として支援 ・出口支援 知識を踏まえた実践への準備、大学と社会との接点

自立支援は、三つの支援から成り立っています。一つは、障害学生が自分自身を“コーディネートする能力の育成”です。日本福祉大学から示された、障害学生が自らの障害とその能力を知り、必要なサポートを自身で探すという動きが、自立への第一歩ですが、それへのサポートです。

二つ目は、いわゆる“修学支援”で、情報保障を中心とした学習や大学生活への支援です。専門的知識の提供という大学固有の社会的役割を達成する上での支援となります。

三つ目は、“出口支援”と書きましたが、就職活動支援や就労支援です。これは、大学で習った専門的知識や技術を基礎として、社会で行なう活動・実践への準備となります。大学と社会との接点、あるいは、教育と社会との最終接点でもあります（大学院、生涯教育、学び直し、など大学教育を終えても学びの場はありますが、ここでは言及しません）。実際的な支援としては、就職活動のテクニックの指導、就職先の紹介、などになりますが、同じように重要なことは、大学卒業後を障害と共にどのように生きていくのかという問い掛けとそれへのアドバイスです。

“どのように生きていきたいのか”、“その中で何ができるのか”、“現実にはどうなのか”、これらに対する冷静な問い掛けとアドバイスをできる能力が、就職委員や就職担当職員に限らず、本学職員全てに必要だと考えます。

●職員の相互理解

さて、第２回・第３回 SD 研修では、聴覚障害系・視覚障害系支援課の現状と課題について両課より報告がありましたが、これは単に講演を聞くだけではなく、本学職員自らも SD 研修の主体的な担い手となることを求めたものです。

FD 研修や SD 研修は、あまり意味がないと、しばしば言われます。“参加者は少なく、聞いて欲しい人は参加しない”というような理由からです。実にその通りですが、だからやめるのではなく、何か手立てをと考え、“発表の前に課内・係内で検討を”と依頼しました。何も会場に来ることばかりが参加ではなく、他方、自分の周りを知るという職員間の相互理解も SD 研修の目的となり得るからです。いつもは話さない人と業務内容を話し合い、考えを知ることは、それぞれの自己啓発に大きく役立つものとなります。

さて、実際にはどうだったのでしょうか。初めてということもあり…。しかし、講演会に出席し、話を聞いて終わりということではなく、それに関連した議論を身近な同僚や組織で行なうという取組みは無駄ではないと思います。

● SD 研修の今後

今回殊更に「SD 研修」を本ニュースのテーマとしたのは、本学の障害学生への教育は、単に教員の教授力の向上にとどまらず、事務職員の学生対応各種能力の開発を含めたバランスのとれた方向性を持って行なわれていること、そのためには本学の“特別性”に胡坐をかかず、この領域で積極的な取組みを進めている様々な大学に助言をいただこうとしていること、そして、職員間の相互理解が日々の業務に大きな役割を担っているとの考えを持ち、その促進を進めていることを、ご理解いただきたいからです。

その上で、今後の SD 研修の方向性を示させていただきます。

(1) 今年度の SD 研修は学生対応が主なテーマでした。これ

第２回 SD 研修の様子

第３回 SD 研修の様子

は本学聴覚障害系・視覚障害系支援課の業務に対応するものです。しかし、本学には、他にも、総務課と財務課がありますが、直接学生と相対さない課においても勿論本学としてのSD研修は重要です。各種企画・広報（総務課）、施設・設備の整備（財務課）にも、障害学生の様々な特徴や、我が国における本学の位置付けを正しく理解した上での業務の推進が必要ですが、今後そのためのSD研修を組み立てることになると思います。

(2) 第2回講演会でお話しいただいた東京学芸大学では、役職者がテーマを決め研修会講師として講演をするとのことでした。“人が何を考えているかは、その人を見ていればわかる”とは、思いません。どのように課を運営したいのか、どのように係の仕事をして欲しいのか、は言わなければわかりません。学芸大方式はこの点において、とても素晴らしい方法です。比較的時間のある夏休みなどに、全学の課長・補佐・係長に講演してもらえば、他の課の職員も聞くことができます。参考にしたいSD研修の工夫です。

(3) 「子は親の背中を見て育つ」ではありませんが、学生は教職員の背中を見て育つのではないでしょうか。学生がちょっと声をかけたくなるような職員の背中、気持ちのよ

SD研修の講評を述べる竹田理事

い挨拶、積極的な行動、他者への配慮や思いやり、これらが溢れている職場は、たとえそこが自分の働く場でなくとも、職員でなくとも、居心地のよいものです。

SD研修は、そのような職場を作るためにプログラムされるべきですし、そのことが素晴らしい社会人を生み出していく大きな要因であると確信しています。

特命学長補佐（SD支援調整担当）　石田 久之

第三回　大学人会を開催

平成20年11月15日（土）14:30から、天久保キャンパスおいて、かつて本学で学んだ学生や勤務したことのある教職員と現役の学生、教職員が一同に会した「第3回筑波技術大学・大学人会」が開催されました。

当日は、80名を超える学生及び教職員OB、現役の学生、教職員などが出席し、まず講堂において卒業生OBによる講演会が行われ、三菱自動車工業株式会社技術開発センター勤務の守本 健児氏（平成11年度聴覚部機械工学科卒業）と株式会社 日立情報システムズ業務サポート本部勤務の穂刈顕一氏（平成17年度視覚部情報処理学科卒業）から、職場での活躍の状況や仕事に対する心構えなどについて講演が

講演の様子

交流会の様子

ありました。引き続いて、近況報告会で大沼学長から、本学の将来構想を含めた近況報告がありました。

その後、会場を食堂に移し交流会が開催され、吉田あこ名誉教授、聴覚障害系同窓会の菊池真里天丘会々長、保護者の会設立に向け尽力されている保護者の会発起人代表である丸谷俊博氏からそれぞれ挨拶がありました。特に保護者の会は、この大学人会が皆の知る所となった最初の場となった筈です。次いで小畑修一名誉教授（元筑波技術短期大学学長）の乾杯発声で懇談が始まり、合間にはOB教職員、卒業生の近況報告があり、OBと現役の枠を超えて旧交を温めました。

総務課

筑波技術大学ニュース　第10号　　発行　筑波技術大学 広報室　　編集　筑波技術大学 総務課
発行日　平成20（2008）年12月　　〒305-8520 茨城県つくば市天久保4丁目3-15　　URL http://www.tsukuba-tech.ac.jp/
E-Mail kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp　　Tel 029-858-9424　　Fax 029-858-9312